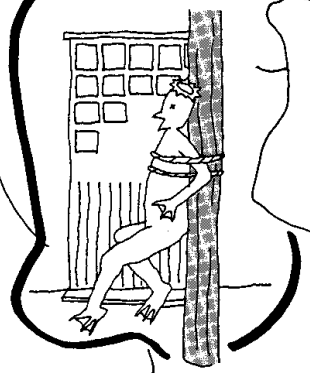
メルヘンいらすとまっぷ

余呉の天女

ある日、若者が余呉湖に舟を浮かべていると、ハヨヨの白鳥が湖面に舞いおり、つぎつぎと乙女の姿になった。乙女たちは着ていたヨヨ衣を湖畔の枝にかけると、楽しそうに水浴びをはじめた……

「日本書紀」に記された わが国最古の天女伝説をもとにした民話

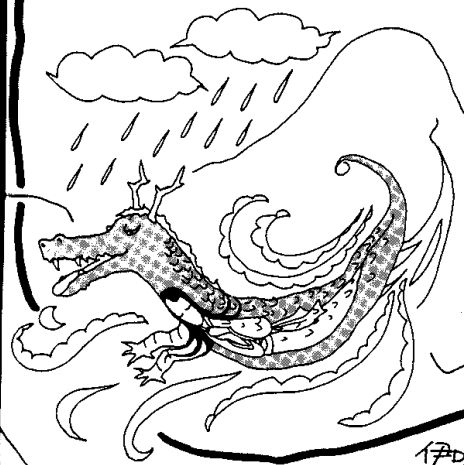
（余呉町）

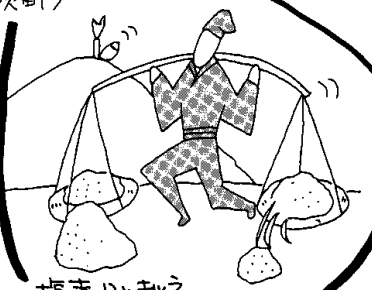


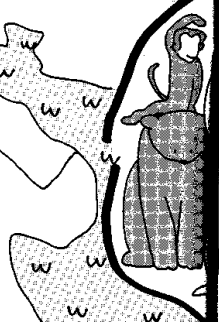
姉川と妹川

遠い昔、伊吹山に毎日雨が降り続き、大洪水の危険にさらされた。伊吹山に住んでいた2人の美しい姫が「何とかして川を通して人々を救いたい」と祈りつつ、身をひるがえして池に飛び込むと、2人の体は竜となり、二筋の川となって琵琶湖に流れ下った。

（伊吹町）







坂田の金時

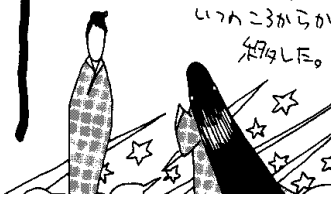
諸頭（もろとう）山の麓「ばんふところ」で乳母に育てられた怪力の持主、金太郎は近くの熊岡山や足柄山で熊や猪たちと遊んだりしていた。20歳になったころ、上洛途中の源頼光に見出され、名を金時と改めて四天王のひとりにかえられる。

坂田は部名。（長浜市）

天の川伝説

天の川は昔は見長川、朝妻川とも呼ばれていた。昔は川をへだてて、世継に織女星にみたてた朝妻星女を、朝妻に彦星にみたてた稚宮星子をまっていたが、一年に一度しか会えないことを哀れんでいつのころからか、彦星を世継神社に祀った。

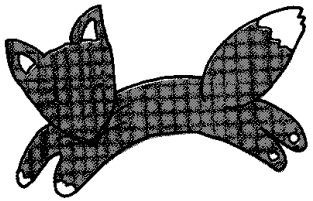
（近江町）



余呉町
木之本町
高月
西浅井町
浅井町
伊吹町
山東町
虎姫町
湖北町
びわ町
びわ湖
長浜市
近江町
米原町

海を渡った日本のメルヘン

田辺満里子さん



満里子さんの紙芝居

紙芝居の絵筆をふるったのは、長浜市東上坂町の田辺満里子さん(二〇)＝写真・嵯峨美術短大専攻科一回生＝。児童文学者として知られる中島智恵子長浜市立図書館長の脚本をもとに、絵本・紙芝居作家、まついのりこさん(東京在住)の監修をうけて描きあげました。「おはなぎつね」にほれこんだ満里子さんは、東京の松井先生宅まで出向いて指導をうけ、何回も描き直す熱の入れようでした。

紙芝居は日本独自の児童文学で、この作品は石川フランケ・サスキヤさん(大津市在住、甲南大講師)夫妻の手でドイツ語に翻訳され、西ドイツ・アウグスブルグ市立図書館での公演では大きな反響を呼びました。(〇頁に関連記事)

おはなぎつね

長浜の町の真ん中に、
大通寺という、大きなお寺がある。
このお寺に、いつのころからか、
きつねが住みついていた。
きつねは、おはなというた。
町の人たちは、
大通寺のことを、ご坊さんとよんでいた。
りっぱなお寺で、長浜の人だけでなく、
遠くからのおまいりも多くて、
にぎわっていた。

お寺の高いところに窓がある。町のどこからでも見える。ある朝のこと、「おや、窓があいてる。」「今朝は天気がええで、お坊さんが掃除でもなさってるのやろ。」「けど、あんな高いところの掃除は大へんやな。」お寺の高窓を見上げて、町の人たちは話しあった。次の日も、気をつけてみると窓は開いていた。あくる日のこと。高窓は、ピタリと閉まっていた。「だれもおらんのに、ふしぎなこともあるもんや。」お坊さんはいった。町の人たちも、首をかしげた。

森と湖のわかいな住んたち。

かめ

photo・吉井知幸

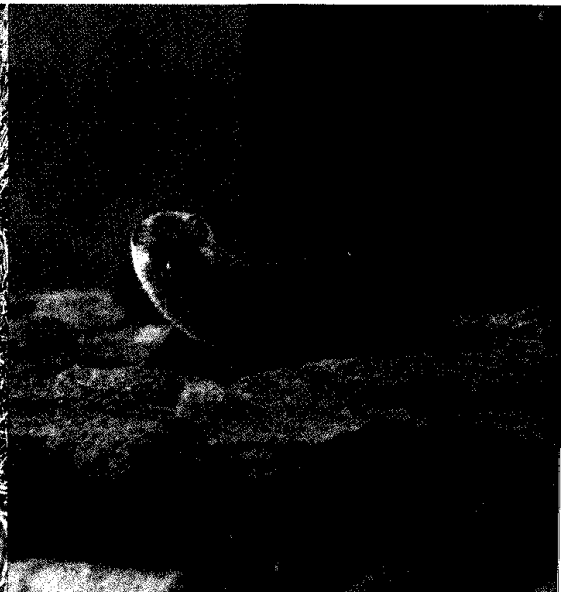
ぼくは余呉湖の亀太郎。鶴は千年、亀は万年と言うくらい長生きなんだ。浦島太郎のお話よりも、もっと前からここの住人で、天女の羽衣を漁師の桐畑三太夫さんが隠し、一番の美女を嫁さんにした様子もこの目で見てるんだ。昔むかし、びわ湖はぼくらの天国だった。湖岸では仲間がゴロゴロ甲羅干ししていた。びわ町の川道の観音さんの辺りがいちばん居心地よかったけれど、沼の埋立てでみんな死んじゃった。だから、今も、この一帯を「かめづか」と言われてるんだ。

くま

オレは丹生谷のツキノワグマ。人間が山の奥の奥まで伐採して植林するものだから、好物のクルミや山ブドウがすっかりなくなってしまった。だから人里へ下りずにいられないんだ。近年、ワナにかかって仲間がずい分減ってしまった。寂しいよ。

photo・吉井知幸

いたち

ぼく、イタチのキチ吉。タヌキよりぼくたちの方がひょうきんだゾ。オチョカのように言われるけど、それだけすばしっこいということだ。朝、ぼくらの姿を見かけたり、右から左へ道を横切ると人間さまは縁起がいいと言ってくれるんだ。

photo・吉井知幸